

# ふるさと絵屏風 フォーラム

2019年2月10日(日) 14:30~15:40

あいこうか市民ホール展示室(滋賀県甲賀市)

山内エコクラブ主催 甲賀市歴史文化財課協働

平成30年度 甲賀市市民協働事業提案制度採択事業

## 二部 パネルディスカッション「ふるさと絵屏風をどう生かすか」

コーディネーター 上田洋平 氏(滋賀県立大学 地域共生センター ふるさと絵屏風提唱者)  
パネラー 谷川重喜 氏(山内ふるさと絵屏風活動リーダー)  
佐甲隆 氏(元公衆衛生医 三重県松阪市在住)  
川戸良幸 氏(株式会社 琵琶湖汽船 代表取締役)  
長峰透 氏(甲賀市 歴史文化財課課長)

**上田先生**：先ほどのフリーセッションではみんなが殺到して、今日は全国で40以上のふるさと絵屏風の絵屏風の中で15地域ですか、全く新しい竜法師地区ももってきていただいて、私はこの集まりを絵屏風親類と呼んでいます。まあ、こんなだけたくさん親類の人と親類と言うと法事か思われますが、これはもう祭りですね、ここからはこの絵屏風のうねりをどのようにまちづくりに生かしていくかをそれぞれの様々な分野からお話したいなと思っています。



株式会社琵琶湖汽船の代表取締役の川戸良幸さん、ご存知の通りミシガン、ピアンカ、琵琶湖市民として、観光分野で中心になってご活躍いただいています。近江の里山から琵琶湖まで自然の文化を「ヒト」「コト」「モノ」で再評価してまちづくり観光の物語を作り出すエコツーリズム滋賀企画の代表でもいらっしゃいます。

そのお隣は佐甲隆先生、元公衆衛生のお医者様で三重県の松阪からお越しいただいております。三重県の保健所長でいらっしゃいましたが、ヘルスプロモーションの第一人者でいらっしゃいます。専門は地域の保健、健康増進だそうです。ふるさと絵屏風が健康・すこやか・生きるにどのようにつながっていくのかということをお話いただけます。

そのお隣は、谷川重喜さんです。山内ふるさと絵屏風の活動のリーダーでいらっしゃいます。地元でこの活動に取り組んでいただいている観点からお話をいただきます。

右端は、甲賀市歴史文化財課の長峰透課長でいらっしゃいます。文化財行政の中でこのふるさと絵屏風をどのようにしていくかをお話いただけます。

まずは、地元の取り組みから聞かせていただきます。

**上田先生**：絵屏風の過程、きっかけを教えてください。

**谷川さん**：谷川でございます。山内の絵屏風はここで6枚ございますが、ここに絵屏風を書かれた先輩がたくさんいる中、私がなぜしゃべるのかと申しますと、つい先日75歳の後期高齢者になりまして、「その祝いにしろ」と先輩から言われまして先輩の言うことは聞かなあかんと言うことでしゃべります。まず3つに分けて話します。



きれいごとばかりではなく、みなさんもお苦勞されたことと思います。山内でもすんなりいったわけではございませんで、まずは「やろう」という「出だし」までがまず第一の大きな山で

して、一つは「そんな昔のことを書いても何の意味があるんや」「もっとこれからのことを描いた方がいいんやないか」という声がありました。

私たちの地域は山村へき地であります。

高齢化率は40～50%となっていて、大事な小学校や保育園が閉校となりました。高齢者の施設もないし、診療所もなくなりました。こうゆう状態で人が出ていく悲しい話しかありませんでした。若い者が出ていく、このままやったら、私たちが生活していた証が残らない。50年100年たったら何も残らないではあかんねん。若い者にきっちり次の世代に生きた証を残していこう、今しかない。という議論を各地区がしまして、何もしないのはあかん、ということになりまして。そしたら先生らに指導をうけて、「いつの時代を残すんや?」「機械化が進む前の牛馬を中心として暮らしていたと時代を描こう」ということになりました。なぜかという、その時代はお互いが助け合いをして、協力して生きてきた時代、そうゆう時代をしっかりと残していこう。その次は聞き取りです。それには、今の80歳、90歳の人から聞く。でも、そんなに元気な人でもだんだん亡くなっていく。今しかないで、聞いたら見える形にする、絵に描く、70才台前後の者が絵を描く、明智光秀の言葉やないけど、「時は今」と言うことで、山内の6地区がそれでスタートしました。先発隊として3地区で始まりまして。

後発隊が遅れて頑張ってきたというわけです。こうゆうようなことで始めからすんなり「描こうか」としてできたわけではない。



一つ目ですけど、反対があるなかで、「時は今しかない」ということで集落がしっかり話し合い、子どもたちに残していく各集落には立派な歴史や生活が残っている、それを残すためにみんなでしっかりと聞き取りをした。その聞き取りをしていったら、ものすごく立派なことがわかった。一つは、お年寄りが力を合わせて描くんです。びっくりした。伊達や体裁で年を取ってきたんやない。今を築いてきた人はお年寄りなんだ。お年寄りの知恵は素晴らしいんだ。必死で聞いて回った。認知症の方やサロンにも来てくれない人にも、家に訪問して子どもたちや私たちが聞き取りをしていくと、聞かれる側のお年寄りの目がランランと輝いて生き生きとしてくる。一つ例に挙げると「今の若い者はお産をしても大事に大事に病院で産ますやろ。私らの時は「この忙しい時に産んでこのゴクたれが〜と怒られた。」忙しんやな、暇なときに産め、道の話や川の話をしたら、手ぶり身振りて話してくれる、それをひたすら聞く、膨大な資料になった。

それを「描く」ことは大きな次の壁でした。みんなが引いていった。80才台の人には描いてもらえない。それで「とりあえず」書こうということ、一つ一つ書き出そうということになりました。

**上田先生：**ずっと聞いていたところですね。女の人はお産の話とか姑の話とか止められないですね。

最初は生きてきた証を残したい、ということではじめられたんですね。

少し聞いてみます。東近江のAさん、大阪城を作ったのはだれですか？

大工さん、歴史の教科書では大阪城を作ったのは秀吉と出てきます。ところが大工さんなんですね。でもその

大工さんのことは教科書には残らない、この大阪城を作り教科書に残る仕事をしてきた人の記録、記憶、歴史は意外と残らない。伝わっていくのは「建てた人」、ホンマに汗した人ではない。



絵屏風というのは、歴史を作ってきた証を地域の人たちが絵として形として残していこうというものなんです。そうゆう話をまずは聞きました。「限界集落の中で大きな危機感の中で私たちはこの集落を残していこうということで始まった」と言うことでした。もう一つは、「やってみだすと面白いぞ」という生きる力、今は電気、ガス、水道が止まって生きていけと言われてたら、皆さんの方が強いかもしれない。

「いきいきとお年寄りが動き出した、話し出したら止まらない」ということで、ここで言う話じゃないかもしれないけど、夜這いのお話をしたら止まらない。みんな元気になって語り合うというのがあります。

若い人たちの高齢者に対してのステレオタイプの「お年寄りって」というイメージがガラッと変わるんです。

続きまして、

医療でのヘルスツーリズムのご紹介もいただきながら、

**上田先生**：「これに関わる中でお年寄りが生き生きとしてきた」という観点からお話いただけますでしょうか。

**佐甲先生**：

私がここにいるのは、私が以前お隣の伊賀上野の上野保健所で何年か保健所長をやっていたまして、その時に竜王さんに出会ってこうゆう活動を知ったのがきっかけです。

3年前から参加していますが、私がやっているのはヘルスプロモーションですけど。

**上田先生**：ヘルスプロモーションというのは聞いたことがない人もおられるでしょうね。

**佐甲先生**：ヘルスプロモーションと言うのはひとことで言うと「健康づくり」ということなんですけれども、普通、健康づくりと言うと、病院に行ったりお医者さんにかかったりと言うことなんですけど、これはある意味医者いらずの健康法ですね。私医者なんですけど…

自分の生活を、生き方、環境を変えていくことで健康になろうと話です。

それで、この絵屏風をどう活用していこうかということなんですけど、まずこの絵屏風づくりは「体」にいい。その次に「心」にいい。しかも「人のつながりを改善する」のにいい。というこの3つなんです。

**上田先生**：良いことばかりですね。

**佐甲先生**：これが実はヘルスプロモーション活動そのものでして、このことがあったら人間健康にいい。

まず昔のことを思い出す、思い出したことをしゃべる、聞く、それを描いてみる、表現してみ、伝えていく、感じていくプロセスが、大事なんですよ。今まで普通のおばあちゃんだった人が、詳しく話し出すとすごいおばあちゃんになる。あれはその人を認めるということになって、おばあちゃんも「私ってただのおばあちゃんやと思っていたけど、こんなに役に立ったんや。すごいおばあちゃんなんや」って自分を認めることになる。認めてもらうプロセスは人間が前向きに生きていく大切なこと。

そしてもう一つは、「しゃべる」ことが大事。平均寿命が女性の方が圧倒的に高いのは「おしゃべり」、女性はしゃべるんです。男の人はしゃべりません。「しゃべる」となぜ良いかというと誤嚥予防、肺炎予防になるんです。飲み込む力をつけるために「しゃべる」発声の訓練にもなる、大きな声でしゃべるのがいい、しゃべっていると脳が活性する、人と話さないと脳を使わないから、ぼーっとしてしまう、だから回想法、昔のことを思い出すのはいい。絵屏風づくりは体にいい、長生きしていくということを最初に申し上げます。

**上田先生**：お医者様から「絵屏風づくりは体に良い」言っていました。絵屏風づくりは、体、心、人のつながり、頭、体が活性化するだけじゃなくて、地域のすこやかづくり、まさに千葉県でも児童虐待の痛ましい事件がありました。個人個人の心の闇の話だけではなく、人と人とでちょっとした顔見てしゃべることができたから、

ちょっとつながりがあったら防ぐことができたかもしれない、と思うような絵屏風ってそんな場も作っていくのかな、絵屏風はいろいろな世代が出てきて、社会のすこやかさを作るんですよ。

WHOの話がありましたね。

**佐甲先生**：WHO（世界保健機関）の健康の定義は、健康と言うのは単に病気になる、病気でない、弱いとそういうのではなくて、まずは「身体的」体の調子が良い、「精神的」心の調子が良い、「社会的」人のつながり、地域の良さ、ええ感じというのが3つがそろって健康というのが、WHOが言っている健康なんです。

**上田先生**：絵屏風もそのうちWHO推奨になるかもしれませんね。



上田先生：その健やかな暮らし、健やかな人々の姿を絵に描いて、最近では観光が資源になるのではないかと  
いうことで、エコツーリズムの視点でお話いただきましょう。

川戸さん：

甲賀市と言うところで、私が琵琶湖の人間がなぜ来たんやと言われますが、私は琵琶湖があるのはその周りの里  
や山があるからだと思っています。その辺を守ってもらっているので、琵琶湖が長い歴史を経て、元気に息づい  
ていると思っています。基本的に琵琶湖汽船は船に乗ってもらうお客さんを集めるのではなくて、山に里にお客  
様が行ってもらって、その源流を訪ねてもらって、なおかつ山から見た琵琶湖がいいねということで琵琶湖にお  
訪ねてもらおう。ツーリズムと言うのは一つの目的だけをお客様に提供するので自分とこだけがお客様でにぎわう  
のではなくて、最近の観光がツーリズムの言葉になってきていますので、そのツーリズムの原点と言うのが日本  
人の観光に対するものを調べてみたら、よく光るものが観光と言われるのですが、その光るものを見るという原  
点には「仰ぎ見てものをけんづる」という人間古来から特に滋賀県の場合は神仏融合、自然からのゆう物(30:08)  
のモノ、琵琶湖、木とか精神的なメンタルなものを含めてそうゆうものに対して拝むとか、仰ぎ見て自分のでき  
ることを捧げる、ものを備えるというのが観光の原点だと思っています。それが、日本で弥生時代、縄文時代か  
ら続いている仰ぎ見ること。そして、そこに行くということ、移動するということ、

今日も会場でいろいろな絵屏風を見て廻るセッションがあり、これもひとつのツーリズムと言えます。交流して  
いる、黙って回るのではなく、みんながしゃべりながら、これが本当の観光の原点なのかなと思います。

山内地域の絵屏風を見て私を感じますのは、ひとつひとつの絵だけを見るのではなくて、この6つの絵を比べて  
みるとそれぞれの地域の特徴がわかります。私も今まで観光マップを作ってきましたけど、ほとんど人がない、  
暮らしがない。それでもこの絵屏風が観光マップになったらどれだけの人が期待感を持って来られるかな。

そして、それぞれの地区の名前、猪鼻ってイノシシの鼻って書いている、「村に悪い奴が来たら入れさせないぞ」  
っという感じ、山中「あのなかで川もありますが、道がこの町を作っているんだな」黒川、黒滝は川やな、黒滝



は白い雪、山女原もなんで「原」ってつくのかな、段々畑になっているんで  
す、最後に笹路は「ササロと書いてソソロ」というんやな、川と道が並行し  
て寄り添って生活しているんやなって。私たち全然違うところから来ると  
絵だけ見てもその土地の名前とその地域が言われるお客様にどのように  
感じられるかを、こいう読み取れる、こいう観光マップがあったら「行

ってみたいな」と感じられる、単なる神社やお寺がある観光マップはどこでもできることだけど、これだけの6  
つのマップがあれば、大阪や東京でゆかりの人が見れば、さっきの先生の話ではないけど、ツーリズムやってい  
て「健康しが」と言うことで都会で疲れたり精神的に肉体的にも疲れた人が、癒しに来てもらえる。湖上もいい  
ですが、ここに来て山村で過ごしてみたい、どんなところかわからない人でもこの絵屏風を見たらわかる。もう  
一つは、私が勉強しているところで、一つの歴史が80年サイクルで動いている、今後100年時代になったとき  
に60歳代、70歳代の方がより元気に地域のほこり、くらし歴史や文化を語っていただくことで、70歳代に  
なれば歳をとっていくのではなくて、若返っていくというエキスで、先ほど先生もおっしゃられましたが、身体  
的、精神的、社会的に良好な状態をいかにつくるかこの絵屏風づくり活動は非常に良いし、まちづくりに活かし  
ていけるし、いろいろな人が訪ねてこられて交流を深める、それが観光、最終的にはこいうものがより多くの  
人に来ていただいて共感を与えて、こいうところに行ってみたいなと思ってもらえることになるのが、まちづ  
くりであり、観光であると思います。本日は楽しませていただきましたし、他の地域の絵屏風も拝見させていた  
だき、それぞれの町がそれぞれ違う特徴がある、滋賀県って琵琶湖しかないのかな、山しかないのかなと思われ  
がちですが、それぞれに特徴があると感じられる琵琶湖で生活している私たちは幸せだなと思わせていただきま  
した。

上田先生：言われてみれば、観光マップには人が描いていないですね、そこに暮らす人を見に来る、暮らしを見

に来る、元気なお年寄りを見に来る、というのいいかもしれません。いろいろな新しい人が来て、しゃべるといいのいいかもしれません。東京に持っていたらなんぼくらいで売れるかな？

今話を聞いていただいて、続きの話を教えてください。

**谷川さん：**

さあ、描く段階になったら、「嫌や」と引っ込んでしまう。でもルールで「みんなが描くんや」「上手下手は関係ない」ということを決めて、ルールは「誉めてほめて描いてもらおう」としていったら、意外な発見が見えてくるんです。自分自身に「ワシこんな才能あったんかいな」とか、仲間に対しても「この人こんなことできたんかいな」とか発見があり。「上手いな〜」って誉めたら、人間気持ちいいし、誰も悪い気がしない、「えっ、そう？それじゃ、また描いてみるわ」って。「じゃ描いて描いて」って繰り返す。

でも失敗もあったんです。どんどん描いていくと、服にペツペツっていっぱい絵の具をつけて、家でなんぼ怒られたか・・・、それで次からは描くときは腕カバーを持っていこう、そして作業服で行こうと知恵でできてきました。だんだん、欲が出てきて、「蛇とマムシ描け」と言われて。。それぞれいろいろな絵がありますね。でもルール決めたのは、一枚に春夏秋冬を入れること、これは統一しました。それぞれの絵が個性あふれて、みんな褒めたくって。みんなできるんやないか、ということで立派な作品ができたせ。良かったです。

子どもにもいい勉強になったと思います。私らの子どもの時は、学校から帰ってきたら、井戸からの水くみ、餌をやれ、牛のふんを片付けよ、とにかくそうしないと生きていけなかった、家族と一緒に暮らしていた牛が死んだら牛さんまいに埋葬したり、牛が売られていくときは家族が泣いたとか、ニワトリの卵は風邪をひいた時しか当あたらなかったとか、兄弟が多かったら当あたらない、そういうことをお年寄りは言ってくれる。一番困ったのはお産の様子、産婆さんがいて赤ちゃんを取り上げたんだけど、そういう絵を描くのは難しく、高校生に助けてもらったりした。

そういうことが苦勞して描いたんだけど、各地区どこもが自信を持っています。

認知症が治ったらいいとは思いますが、お年寄りは自分の能力を認めてもらえる、発揮できる場所があれば絶対大丈夫です。生き生きする、どこでもそうだとそうだと思いますが、山内の人は「お年寄りが大事だ」という認識は広まったと思います。

私たちはこれをやって、次の次の何とかしないとあかん、誰も助けてくれない、自分たちでやらなあかん、へき地はへき地でやらなあかんということを絵屏風活動を通じて山内のみんなが改めて感じたことです。声を大にしたいことです。

**上田先生：**「誉めまくる」ということに対して

**佐甲先生：**大ありです。普通、お医者さんは診察するときに「あなたのここが悪いよ」「酒飲んだらあかんよ」「肝臓悪いよ」「腎臓が悪いよ」と言いますでしょう。

アメリカの立派な心理学者が、「人間と言うのは悪いところを指摘されたから自分を変えられるのところが、人間はありのまま認められて初めて自分を変えられるんです」と言ってます。

「あかんあかん」と言われても変えようとする力が出てこない。そこで言ってもらったように力が出てくるには、誉めてもらう、認めてもらうことで自分を変えようという

健康づくりは自分と地域を変えていこうということですから、良いように変えていく力がどう出るかが大きなテーマです。

**上田先生：**そう言われてみれば、お医者さんに行ったら悪いところばかり言われる、そうだ。絵屏風をしていたら良いところ発見ができる。良いところを発見して自分たちでやっていくという自覚ができる。

まちづくりそのものなんですね。

**上田先生：**まちづくりと言うと、地元の方は「何もないんだ」と言いますが、そんなことはないんですね。

その辺を、行政の立場から長峰課長、よろしくお願いします。

**長峰課長：**私も文化財保護の仕事をしています。絵屏風に関わらせていただいたのは今郷好日会さんとの市民協働事業での関りで、甲賀市第一号の絵屏風だったと思います。その他、山内では太鼓踊りが盛んで、今から50年前に太鼓踊りの中でも「じゅんやく踊り」という大変難しい踊りがあって「あの踊りをすると腰をいわせてしまう」とまで言ったようなんですけど、それも「今残しておかないとなくなってしまう」ということで、映像に残してDVDにしたんですけど、週に2回ほどの山内の黒川に通っていました。あれが平成23年くらいだったと思います。文化財とは幅広くて、私たちがやっているのは、物を言わないものに対しての文化財です。仏像に「何年くらいに作られたの？」てなんぼ声をかけても言ってくれない。食べ物もそうです。

生きた文化財、生活目的、資産、お年寄りの持っている記憶は遺産じゃなくて生きているので資産としていかしていくのは、立派な文化財と思っています。こうゆうものを扱うのは、民俗文化財でお年寄りから話を聞いていく、この時に大切なのはあまり地域のある偉い先生から話を聞くのではなくて、ごく一般のお百姓さんにきくのが基本なんです。知識人の方は古文書などを読んでお勉強される、自分の推測が入って話される、けどお百姓さんは、自分の経験に基づいて日常の暮らしを淡々と話される、ここを大切にしないといけない。誉めるということも言われましたが、これまでの民俗学者の悪いところは上から目線で「しゃべってください」って、こうなんですかと一方的に引き込んでいて、誰もわからない、論文、報告書が出来上がってしまう。それは地域に生かせない。絵屏風は違う、困難で難解な論文よりもここに描かれている人は生き生きしている。

絵屏風を見た感想は、あちこちで人が集っている、非常に楽しそうなんです。我々がこれまでお話を聞いてきた中では楽しかった経験ばかりでなかったと思うんです。実は辛かった経験もあったと思うんです。例えばお風呂がなくてもらい風呂をしていた、水は川の水をくんでいた、井戸の水は冷たかった、それで野菜を洗わないといけなかった、牛の世話、山仕事、畑仕事大変だった、近所付き合いも煩わしかったり、生活の中には、つらいこともあって、それが文化的な都会的な生活をしてみたいようになって生活改善によって自分たちがしてきたことを自己否定してきたいうところもあったのかな？でも絵屏風を製作することがきっかけとなって、それが自己肯定に変わっていくのじゃないかな、つらい経験も包みこんだ中で実は楽しい話と持っていき、楽しい絵になっている、これでいいんじゃないかなと思うんです。辛いこともあった中で、それを包みこみ楽しい絵として絵屏風に完成して、お年寄りが生き生きとして語っていく、絵屏風の良いところじゃないかな。子どもたちの遊びもメンコをしたり、縄跳びをしたり、芝居小屋があったり描かれている、みんなが楽しい集っている。そうゆうことを子どもたちに伝えようということで、民具をもって学校に行っている、民具もだんだん使い方がわからなくなっていく、そこでとお年寄りの語りを加えることによって、生きた文化財になってくる。文化財と言うと大きな博物館に入れてしまっ、お蔵入りになっていく。博物館に展示はしていてもモノだけが並んでいる、のではなくてお年寄りの語りによって民具が生きていく。子どもたちに伝えていくのですが単に「昔は良かった」というのでちょっと不十分だろう、何のために伝えていくのか？苦労感を伝えるのではなくて、子どもたちにはこれを通じてなにか「ふるさと感」を醸成できないだろうか。と思っているのです。

子どもたちは何年したら、学生になり働いて都会に行くだろうと思うんです。でもなにかのきっかけで何年かして帰ってくると思うんです。そこには、太鼓踊りがあって、お墓があって、山の神があって、先祖さんや自然を敬う気持ちがある、もう一度思い起こしてもらおう。成人式に帰ってきたら昔話に花がさく、この地域は良かったね。住み続けたい、住んで良かった、まちづくりにこの思い出、記憶が伝わっていくように子どもたちにも伝えていかないといけないかなと思っています。

上田先生：しゃべらない文化財を指定できないのかな。

子どもたちに伝えていく、ここに描かれていることは、楽しいことも辛いこともあったけど、やっぱりここで生きていてよかった、みんな、それが地域なんだ、一生懸命生きてきたここに自分が生まれてきたんだ。

おじいちゃんたちはこんなに地域を愛しているんだということが伝われば。

**上田先生：**続けていくためにどうやっていかしていくか

谷川さん：どうゆうふう実践していくかになると、昔からのつながりを。絵を描いたことで昔からのことを、語り部として伝えていくことが大事だと思います。山内のすべての語り部として「生きてきた証」を伝えていく、先日、小学校に出前講座にいきました。七輪を使ってお餅を焼く経験を子どもたちと一緒にしたのですが、単に餅を食べるというのではなくて、火の付け方、炭の種類、火の消し方、親切丁寧に実践教育をした。子どもたちには要請があれば行きたいと思っています。絵屏風の中に子どもたちの遊びが描いています。川遊びだったら、上級生が川に落としたり溺れる寸前に助けたり、そり遊びだったら、上から上級生が押ししてみたり・・・で泣いているけど助けたり、そういうことは上級生から下級生へのルールというのができていた、そういうルールは伝えていきたい、また、絵屏風作成に取り組みたい地域もあると思います。手伝えることがあれば、山内の仲間が出前講座もしていこうと思っています。広がっていくことを願っています。

お年寄りには、教育と教養が必要だと思います。

「今日行くところ」「今日用事があるところ（居場所）」が必要だと思います。

上田先生：最後に大喜利をしたいと思っています。「ふるさと絵屏風と掛けてなんと説く、その心は？」で、みなさんにお話ししたいと思っています。

川戸さん：「ふるさと絵屏風」と掛けて「観光まちづくり」と説く、その心は、「骨を折らないと立ちません」これは、屏風だから折れ曲がっている、ということで、折れ曲がると屏風は立つんです。拍手  
もう一つは、「ふるさと絵屏風」と掛けて「観光まちづくり」と説く、その心は「暮らしと文化と誇りに根付くことが必要です」。みなさん、自信と誇りを持って地域を伝えていただければ、売方は任せて、ぜひ受け入れをお願いします。「何もない」と言わずに、「何もない」と言っている人がこれだけ集まれば、こんななにかある、絵屏風ができることに自信をもってください。

上田先生：「何もない」ということが「ある」んです。「無事」がある。この後はみんな商談会ですね。これもみんなですということが良いんですね。次はビアンカの上での絵解き大会も良いですね。

佐甲先生：「ふるさと絵屏風」と掛けて「駅の忘れ物、落とし物係」と説くその心は「なくしかけたものを取り戻す」。今気づいたのですが、この絵屏風の中には、今あるものともうなくなったものがあるんです。もうなくなったものを見ていると、今思うと良かったなと思うものがある。その時は当たり前だった、惜しかったなと思うものがある、大切なものはなくさないとわからないものなんです。新幹線で東京方面に行くときに、三河安城の駅があるんです、その手前の工場の看板にこう書かれている「なくしてわかるありがたさ」って。

何かなと思って見てみたら「親と健康とセロテープ」と書いていて、ニチバンという会社なんですね。

やはり、なくす前に、なくす前に健康もそうだけど、なくす前にゲットすることが大切なのかな？「当たり前」と思っているものは大切さがわからない、これを発見していくきっかけにしてほしい。

もう一つは、ここに描いているものは絵、モノなんです。この絵にかけないルール、助け合いの気持ち、人情とか村の約束とかを語っていただくときに思い出していただくこと、また大事なのかな、その中での知恵、健康に生きていく知恵も大切なのかなと思います。

長峰課長：「難解な論文」と説く、「ひとめでわかる」ということです。

山内にとって大切なことはなんだろう、この山内の魅力をなにかのテーマとして言葉としてテーマにできないかなと思うんです。魅力をストーリーとしてまとめ上げる、ここにきたらこんなことができるんだな、ワクワクできるんだなということ。島根県の沖ノ島と言うところでは、「ないものはない」ということをキャッチフレーズにしてまちづくりをしているまちがあります。そこに行ったら、レジャーなど都会ではやっているものはないのですが、そこに行ったら自然の恵み、人のつながりコミュニティ、山の幸、海の幸、がある。山内も



いろいろな地域としてイメージしてってます。何を残していくのか？何かを残すために何を変えていくのか？ひとつには「地域を見るまなざし」を変えていく、今までは何もなかったというところから、〇〇\_\_\_があれば、宝の宝庫ですよ。そういうものを検証していく。テーマが大切なのではなくて、このプロセスが大切なのかな？みんなで集まって議論して、しゃべっていく未来志向型で話していく、絵屏風ができたのはゴールではなくてスタートと言うことで。

谷川さん：「ふるさと絵屏風」と掛けて「認知症をぶっ飛ばす」その心は、「忘れた記憶を呼び戻す」

上田先生：お寺の和尚さんがなにか言われたらしいですね。

谷川さん：地域のお寺の和尚さんが「うーん。これを見たら安心や」と喜ばれたんですよ。

上田先生：この二部は、どうゆう風に生かしていくかという場所でした。ありがとうございました。

私も最後に大喜利を「ふるさと絵屏風」とかけて「日曜夜8時、NHKのテレビ番組」と説く、その心は「素晴らしい絵画ドラマが始まるでしょう」

これからは、皆さんたちが主人公の大河ドラマが始まるんです、ここから生み出していく、そして応援してくれる人たちがいるんです。

竜王みやび(司会)：私は小学校5年生から山内エコクラブの活動をしておりまして、山内ふるさと絵屏風にも関わらせていただきました。今現在は大学でであった仲間とともに、日野町の鎌掛地区で活動をしているのですが、このふるさと絵屏風を見ると、井戸を使った昔の暮らし、牛がいて一緒に暮らしていた、いきものがたくさんいたとかあるのですが、ふるさと絵屏風からわかることは、また水、ものを大切にしていたこと、人と人、人と自然のつながりに感謝していた時代があったということがわかるんですね。今は水道をひねったら水が出るという当たり前になっていて昔のような生活、時代には戻れないのですが、絵屏風が描く助け合い、学び合いを今求められるべきかなと活動を通じて思っています。若者としては地域に関わるということが大切なのではないかな、絵屏風等の地域資源を伝えていくことが私たちの役割なのかなと思います。

私は小さい頃からの活動を通じて、「おたがいさま」ということをお年寄りから学びました。これ、なかなか私の周囲の若者には通用しないんですよ。「してくれたからお返しに」的な二者のキャッチボールはあるんだけど、見えない恩と言うか、回りまわると言う“おたがいさま”ですね。こういう循環な心、社会を広めていくことが大切なのかと思います。

